

2013年10月21日(月)

中国で拡大するキリスト教

 ツイート
  シェアする
  チェック
  + 共有する
  ?

*NHKサイトを離れます



高尾

「習近平体制発足から1年。

これまでのような高い経済成長が難しくなる中、中国は今、“宗教”という新たな課題に向き合わざるをえなくなっています。」

黒木

「物質的に豊かになる一方で、激しい競争社会に疲れ、宗教に心のよりどころを求める人々が増えています。

最も信者を増やしているのが、キリスト教です。

中国には、以前から政府の管理下にある公認の教会がありました。今、急増しているのは、政府の公認を受けない“家庭教会”と呼ばれる教会です。

現地で取材しました。」

家庭教会 急増の背景

改革開放で成功した経済都市、浙江省の温州。

今、温州では、人口の7分の1がキリスト教徒と言われるほど、信者が膨れ上がっています。

中でも急増しているのが、“家庭教会”と呼ばれる無許可の教会です。



牧師

「イエス様を信じてますね？

アーメン！」

信者たち

「アーメン！」

牧師

「アーメン！」

信者たち

「アーメン！」

教会の中には、政府公認のものもありますが、共産党の政策の学習や名簿の提出などを求められることもあるため、家庭教会の中には、政府の介入を嫌って、公認を受けようとしないとすることも多くあります。

ただ、信者や指導者に政府への反発の意思はなく、純粹に信仰と向き合いたいと考える人がほとんどです。

この男性は、豊かさへの憧れから、破格の報酬をもらえる企業家の用心棒となりましたが、やがて仕事を失い、麻薬にも手を出すなど、身を持ち崩しました。

廃人寸前だった男性を救ったのが、家庭教会でした。
教会の施設に寝泊まりさせて、食事の世話までしたということです。



男性
「自分でどうすることもできなかった時に、信者の皆さんが助けてくれました。
その時の感動は、言葉では表現できません。」

政府が本来行うべき、セーフティネットの役割を担っていることもあって、家庭教会の信者の数は増え続けています。

宗教への対応 迫害から支援へ

建国以来、無神論を唱えてきた共産党。
文化大革命の時代には、宗教を徹底して迫害しました。
改革開放で宗教の自由を保障しましたが、その後も警戒の対象にしてきました。
しかし、宗教に心のよりどころを求め人が急増する中で、姿勢を大きく変化。
政府の管理を受け入れるかぎり、支援していく方針を示しました。



胡錦濤総書記(当時)
「宗教界の人々にも、経済や社会を発展させる役割を果たしてもらおう。」

江蘇省の中心都市・南京。
この夏、地元政府の支援で、真新しい巨大な教会が完成しました。
現代風の設計で、5,000人を収容できます。
建設費は、日本円で15億円。
3分の1の5億円を政府が負担したほか、敷地となっている時価70億円分の土地も、
政府が提供しました。
最近では、経済発展の陰で、厳しい競争に疲れた都市部の若い世代も多く通うようになりました。



女性
「礼拝で心が落ち着きます。
信仰によって、生きがいを感じられるのです。」

家庭教会への取締りも

しかし、政府の公認を受けない家庭教会に対しては、厳しい取締りを行う場合もあります。

北京では一昨年(2011年)、政府の管理を拒否し、屋外で礼拝を開こうとした家庭教会が摘発を受けました。

「社会の秩序を乱す」として、その指導者は今も軟禁状態で、24時間、当局の監視下に置かれています。



話 摘発された家庭教会(守望教会)指導者

「自由が全くないです。

家の前に人がいて、24時間監視され、家の周辺以外には行けません。

政府は教会を管理すべきではありません。

信仰と政治は切り離すべきです。」

こうした中、政府から公認を受けた教会の中からも、家庭教会で教えを説こうとする牧師が出てきています。

信者4,000人を抱える、公認教会の牧師の陳生未さん。

家庭教会での自発的な活動を通してこそ、純粋に基督教の教えを広めることができ、人々の心を満たすことができると考えています。



陳生未さん

「決して政府に反抗しようとしているわけではありません。

ただ私たちは、この国のために祈っているんです。」

キリスト教 なぜ人々をひきつけるか

高尾

「ここからは、取材にあたった、上海支局の奥谷支局長に聞きます。

中国の宗教というと、われわれはまず仏教とか、儒教ということのを思い浮かべるんですけども、今、なぜ、基督教に人々はひきつけられているのでしょうか？」

奥谷支局長

「中国では、仏教や儒教も急速に広まっています、仏教の信者は、2億人とも言われています。

ただ、取材した若者は、中国の仏教のお寺などでは、お金儲けや無病息災など、現実的なものを求めて参拝するイメージがあるのに対して、基督教は自分の内面と向き合うことになり、教会の雰囲気も厳かな感じがすると話していました。

小さいころから、映画や音楽などで、欧米文化に触れて影響を受けているほか、海外旅行や留学で基督教に触れる、という事情もあると見られます。

基督教の中でも、プロテスタントは増え方が急で、公認教会の信者数だけで見ても、カトリックが30年前の2倍なのに対して、プロテスタントは8倍の2,300万人、さらに、これに加えて、非公認の家庭教会は、これは公式統計がありませんが、7,000万人を超えと言われるほどにもなっています。

カトリックがローマ法王と中国政府の対立を抱えているのに対して、プロテスタントは中国に入りやすく、またカトリックに比べて、聖書さえあれば、小規模な礼拝ができてしまうという事情もあると見られています。」



宗教支援の背景は

黒木

「中国政府は、宗教を支援するよう方針を転換していますが、その背景には何があるのでしょうか？」

奥谷支局長

「中国共産党は、これまで宗教の広がりには、ずっと警戒感を持ってきました。

中国の長い歴史の中で、王朝が倒れる前には、必ずと言っていいほど、宗教を掲げた集団が内乱を起こした歴史があるためです。

また中国共産党は、党員に宗教を信じることを禁じていますが、これは共産主義の前提にある無神論と相反するほか、党員が宗教的な権威を認めてしまえば、党の求心力を保てなくなることを警戒しているためと見られます。

しかし、2007年の共産党大会を境に、共産党は、宗教を取り込もうという政策にかじを切りました。

これについて専門家は、宗教を信じる人があまりにも多くなり、宗教を軽視した政策は非現実的だと認識し始めたこと、さらに宗教によって人々の心が安定するのであれば、それが社会の安定にもつながる、と考えていることが背景にあると見られる、と話しています。

中国政府には、公認の宗教を支援することで、宗教を管理下に置こうという狙いがあるように見られます。」

“信仰のコントロール”可能か

高尾

「社会主義と宗教ということは、ずっと永遠の課題と言いますか、難しい歴史的な背景もあるわけですがけれども、中国政府には、公認の宗教を支援することで、宗教を管理下に置こうという狙いがあるように透けて感じるんですけども、人の信仰をコントロールするという事は、中国でも難しい側面があるのではないのでしょうか？」

奥谷支局長

「そのとおりです。

中国政府は、政府の管理を受け入れる教会や宗教団体のみを公認して、それ以外に対しては、今でも大規模な集会を開くことを取締りの対象としています。

政府が各地で巨大教会の建設を支援するというのは、私たちの感覚で考えますと、不思議なことなんですけれども、これは信仰を持つようになった人々を、管理の手の届かない非公認の教会ではなくて、公認の教会に招き入れたいという思惑もあると見られます。

しかし、こういう思惑どおり、公認教会に今後、多くの人が集まるのか、家庭教会がさらに広がっていくのかは分かりません。ただ、確かに言えることは、多くの人々が政府に指示によってではなく、自分の意思で内面に向き合いたいと考えているということです。

官僚の汚職や環境汚染などの社会問題に対する不満、競争社会のストレスや不安感など、さまざまな問題に中国が直面する中で、中国には、もっと宗教が必要だという人さえ増えています。

専門家の1人は、人々が豊かになるにつれて、安心して暮らしたいという権利意識に目覚めるとともに、個人として自由に物事を判断したいという、近代市民社会の基盤となる、いわば“個の発見”が始まったのではないかと話しています。

中国共産党が宗教を取り込んでいくのか、宗教がその思惑を超えて広がっていくのか、中国の今後を占う大きな曲がり角に来ていると言えます。」



◀ この番組の特集まるごと一覧

このページのトップへ戻る▲



Copyright NHK (Japan Broadcasting Corporation). All rights reserved. 許可なく転載することを禁じます。

NHKオンライン | NHKにおける個人情報保護について | NHK著作権保護 | NHKオンライン利用上の注意 | 番組表